

## 生化学若い研究者の会 創立60周年記念シンポジウム 「生命科学の来し方行く末」・創立60周年記念祝賀会 開催報告

西村 亮祐<sup>1,2</sup>, 中川 香澄<sup>1,2</sup>  
(<sup>1</sup>徳島大学, <sup>2</sup>生化学若い研究者の会)

生化学若い研究者の会（生化若手）は生命科学分野全般の大学院生を中心に構成され、日本生化学会の後援の下、全国各地で研究会や交流企画を開催している若手研究者団体である。毎年夏に行う滞在型研究会「生命科学夏の学校」が最大のイベントとなっている。当会は1958年の日本生化学会大会（札幌）の「自由集会」にて結成された（生化学，30, 411–412, 1958）。そして本年，2018年に創立60周年を迎えた。京都国際会館にて行われた第91回日本生化学会大会の大会1日目，9月24日に記念シンポジウムならびに祝賀会を開催した。

### 記念シンポジウム「生命科学の来し方行く末」

本年の大会テーマは「日本の生化学100年～伝統と革新～」であった。膨大な知見の蓄積と実験・解析技術の飛躍的な進歩に伴い、生化学（生命科学）の研究の在り方も移ろってきた。われわれ生化学若い研究者の会においても、その時々々の社会情勢に応じて活動の形を変化させてきた。生化若手創立から60周年という節目の機会に、生命科学研究のこれまでとこれからについて討論することを目的に、本シンポジウムを開催した。

今回のセッションでは、著名なシニア研究者から新進気鋭の若手研究者まで5名の演者を招いて講演・討論を行った。演者に共通しているのは「生化若手にゆかりがある」ことだけ。多様な視点からの議論を促すため、意識して異なる研究分野のトピックを選定するよう留意した。生化若手関係者のみならず100名近くの聴衆が参加し、会場は立ち見が出るほどの超満員となった。

冒頭では今回の創立60周年企画代表世話人でシンポジウム・オーガナイザーの西村が生化若手の概況と企画趣旨の説明を行った。最初の講演は山岸明彦氏（東京薬科大学・名誉教授）で、同世代の正木春彦氏（東京大学・名誉教授）による演者紹介でスタートした。講演タイトルは「宇宙における生命の起原と生命探査」で、飛行機や気球を使った微生物採集の成果をお話いただいた。火星での生命探査の壮大なプロジェクトの構想についても語られ、多くの聴衆の関心を惹き付けた。

続いて、本大会の会頭であり、学生時代には「夏の学校」に参加されていた菊池章氏（大阪大学大学院医学系研究科・教授）より、「シグナル分子の探索と機能解析を基

盤とした創薬研究」と題し、Wntシグナル関連分子の探索を中心にお話いただいた。オミクス解析の時代の到来とともに、分子・細胞から組織、そして個体まで幅広いスケールで研究を展開されている。座長の伊東広氏（奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科・教授）の進行のもと、質疑応答が繰り広げられた。

3人目の演者は米国でPIとして活躍されている三品裕司氏（ミシガン大学歯学部・教授）。三品氏からは「頭蓋顔面形成における骨形成因子（BMP）の役割」についてお話いただいた。座長は岩田想氏（京都大学大学院医学研究科・教授）。若手の会での活動についても大きく言及され、当時培ったつながりが、米国に渡って30年近く経つ今でも貴重な財産となっていることを強調された。

藤原慶氏（慶應義塾大学理工学部・専任講師）からは、「細胞を創る：細胞分裂面決定機構の人工細胞内再構成」と題し、独創的な研究を軽妙な語り口でご紹介いただいた。座長は飯島玲生氏（名古屋大学大学院情報学研究科・特任助教）。物質の自律的拡散といった生命の基本的現象を人工的に再現するべく、分子生物学と生物物理学の視点を組み合わせて取り組んでいるというもので、生命科学においても学問分野の境界がなくなりつつあることを感じさせた。

最後の演者は谷中冴子氏（自然科学研究機構分子科学研究所・助教）。座長は馬谷千恵氏（東京大学大学院理学系研究科・助教）で、「抗体研究から学ぶこと」というタイトルの下、抗体の機能を分子・原子レベルで明らかにする取り組みについてご講演いただいた。高速AFMを用いた細胞膜上での抗体の運動の観察など、最新鋭の技術を用いたアプローチが光った。

フロアには20代から80代までの様々なバックグラウンドの研究者が集い、世代や研究分野を超えた活発な討論が繰り広げられた。生化若手OB代表世話人でシンポジウム・オーガナイザーの稲垣賢二氏（岡山大学大学院環境生命科学研究科・教授）による総括をもってシンポジウムは閉幕した。

### 記念祝賀会

シンポジウムに引き続き、会場をグランドプリンスホテル京都に移して記念祝賀会が執り行われた。OB代表世話人の稲垣賢二氏の開会挨拶に引き続き、来賓を代表して日

本生化学会会長の山本雅之氏（東北大学大学院医学系研究科・教授）よりご挨拶いただいた。続いてOGを代表して郷通子氏（名古屋大学・理事，名誉教授）よりご祝辞を頂戴した。乾杯のご発声は当会の創設者の一人である吉川寛氏（JT生命誌研究館・非常勤顧問，大阪大学，奈良先端科学技術大学院大学・名誉教授）。乾杯ののち，当会の設立経緯についてお話しいただいた。しばしの歓談の後，各世代を代表する先輩方から話題を提供いただいた。1961年に開催された第1回夏の学校（当初はサマースクールと称した）の校長を務められた大島泰郎氏（共和化工株式会社環境微生物学研究所・名誉顧問，東京工業大学・名誉教授）からは，夏の学校の開催経緯や当日の活動の様子について当時の写真を振り返りながらお話しいただいた。当時はクーラーがなく，実験をするにもできないので，夏に勉強会を開こうと考え，夏の学校が始まったというのには驚いた。次に，太田成男氏（日本医科大学・名誉教授，順天堂大学・客員教授）より70年代のセンター事務局の活動についてお話しいただいた。当時大きな懸案となっていたオーバードクター（OD）問題の解決に向け，生化若手と日本生化学会がそれぞれ行った大規模な実態調査を取りまとめ，対外的にアピールした様子を話していただいた（生化学，49, 1259-1260, 1977; 科学，48(6), 375-377, 1978）。会の活動を通じて研究者としての心構えを学んだという。続いての登壇者は第25回夏の学校（1985年）の事務局長を務められた倉元綾子氏（西南学院大学人間科学部・教授）。倉元氏は当会の25周年記念誌の編さんにおいて中心的な役割を果たされ，その経験が後に自身の家政学史研究につながったこと，わが国の女性研究者が今なお厳しい状況に置かれ続けていることなどを語られた。同じく80年代に活躍された先輩からもう一方，養王田正文氏（東京農工大学大学院工学研究院・教授）。後継者不足から夏の学校の存続が危ぶまれた際，「年長組」を名乗るベテラン有志たちが運営を立て直した経緯を紹介された。そして10年前に夏の学校の実行委員長を務めていた飯島玲生氏より，活動当時を振り返って改めて考えた若手の会の活動の意義や，多様なキャリアを進む生化若手関係者のネットワークから生まれる取組みの可能性についてお話しいただいた。最後に現役世代

を代表して新代表の落合佳樹氏（埼玉大学大学院理工学研究科・博士前期課程2年）より現在の活動状況の紹介が行われた。どの演者のスライドにも共通して，全国から集った若手研究者が熱心に議論する様子が写っていたのが印象的であった。それは長い時を経ても「議論を重視する」若手の会の精神が変わらず根底に流れ続けていることを示していたように思う。会場では懐かしい顔ぶれとの再会を楽しむだけでなく，異なる世代の参加者同士が積極的に交流している様子も垣間見られた。筆者の西村が閉会の言葉を述べ，名残惜しい雰囲気の中で祝賀会は閉会した。

## 開催を終えて

開催準備の段階において，過去の資料にあたり，諸先輩方とのやり取りを進めるうち，この会の歴史の重みと活動の意義の大きさを改めて実感した。当日に会場で交わされた議論や口々に語られた思い出話を聴き，その確信はさらに強いものとなった。郷通子氏のご祝辞の中で「こうした分野の垣根を超えた革新的な大会シンポジウムは生化若手ならでは」と評されたように，こうして時を超えて多分野の生命科学研究者が集い，議論と交流を深めることができたのも，若手の会という場が必要とされ，代々存続し続けたからこそであろう。この会の創立に携わった先輩方，60年もの間にわたって受け継いでこられた先輩方に心より敬意を表す。冒頭で述べたように，この会も時代に応じて少しずつ活動の形を変えてきた。70年，80年，そして100年と継続していくためには，守るべきところは守り，変化させるべきところは柔軟に変えていくが必要ではないだろうか。偉大な先輩方から受け取ったたすきをしっかりと次世代へとつなげ，この会を，そして日本のサイエンスを末永く発展させていきたい。

## 謝辞

本シンポジウムならびに祝賀会は，日本生化学会から協賛，ご支援をいただき開催されました。また企画実施にあたりご協力いただきました生化若手OB，OGの先輩と現役スタッフの皆様に深く感謝いたします。



記念シンポジウムの様子



記念祝賀会の様子



